南岳慧思の頓覚説

――頓覚と行位の問題を中心として――

山野俊郎

一　はじめに

『続高僧伝』巻十七に収められる南岳慧思（五一五―五七七）伝に、次のような記事が見られる。光州大蘇山に在って、金字の大品般若経の書写供養を終えた慧思は、人々の要請に従い、その金字般若経を用いて「文に随い尽に造る」幽遠な講義を行ったが、後には彼の下にいた江陵の学士智顗（五三八―五九七）にそれを代講せしめた。しかるに、智顗は「一心具三万行」の箇所において、経文の真意を把捉し得ず、疑問を生じるに至った。この時、慧思は智顗に対して、「汝、向に疑う所、此れ乃ち大品次第の意のみ。未だ是れ法華円頓の旨にあらざるなり」と諭したという。①すなわち、この折、慧思には既に大品般若経の「次第」を旨とする教説に対し、法華経は「円頓」の義を説き明かすものであるとする明確な認識があったことが知られるのである。この法華円頓義を行者の上に現成せしめる頓覚・疾成仏道の理想的な行法が、慧思によって組織された法華三昧行であった。一方、慧思は菩薩の行位論への関心が頗る強く、菩薩瓔珞本業経（以下、瓔珞経と略記する）の四十二位説をほぼ全面的に依用していた。それならば、この法華三昧行は、瓔珞経所説の四十二位中、どの階位への頓入を目指すものと考えられたのであろうか。本稿は慧思教学における頓覚と行位の関係を検討することによって、頓覚・疾成仏道の行法として組織された法華三昧行を、更には慧思の仏道観を、行位説との関わりで明らかにしようとするものである。

二　頓覚説

慧思は主著『法華経安楽行義』の冒頭において、法華円頓の旨を実現せしめる頓覚の行法として、法華三昧行を高唱している。

法華経者大乗頓覚、無師自悟疾成二仏道一、一切世間難信法門。凡是一切新学菩薩、欲下求二大乗一、超二過一切諸菩薩一、疾成中仏道上、須下持戒忍辱精進、勤二修禅定一、専心勤中学法華三昧上。[2]

このように、法華経が頓覚・疾成仏道を説き明かす大乗の法門であり、法華三昧行の修学によって、諸階位にある菩薩たちを超過し、速疾に仏道を成就することが述べられている。また、慧思は「妙法蓮華経」の経題釈において、「蓮華」（＝法華の利根菩薩の法門に喩える）と「余華」（＝二乗及び鈍根菩薩の法門に喩える）を比較し、「余華の実を結ぶは顕露にして知り易く、蓮華の実を結ぶは隠顕見難し」と述べ、鈍根菩薩については、「対治行を修し次第に道に入る。初一地に登るは、是の時名づけて法雲地と為すことを得ず。地地に別修し証は一時にあらず」と説き、一方、法華菩薩については、「一心一学、衆果普く備わり、一時に具足して次第に入るにあらず」と説明している。[3]すなわち、二乗や鈍根の菩薩が煩悩を漸次に退治する次第行の道を、一地から一地へと歩んでゆくのに対して、法華の利根菩薩は一心に法華三昧の一行を学ぶことにより、次第行を修することなくして、頓覚を成じ、一時に衆果を具足し、速疾に仏道を成就するのであって、これは難見難解の法門であるというのである。

慧思によれば、頓覚が主張される理論的根拠は一乗の思想にある。一乗とは、一切衆生が、三乗の別なく、本来同一法身であり、「如来蔵をもって畢竟恒に安楽」であって、畢竟成仏の道に在ることをいう。「安楽」とは、生死の迷いを生み出す「三毒・四大・五陰・十二入・十八界・十二因縁」なる一切法の中にあって、畢竟空の故に受陰なく心不動であり、心に解脱を得ていることの謂である。かくの如き衆生の本来的在り様が、如来蔵、法身蔵、仏性、六根性清浄、六自在王性清浄などの用語によって説明されている。また、慧思に依れば、一切の煩悩は愛無明（貪愛心）の一煩悩に収まるのであり、そして、この最も困難な根源的煩悩である愛無明を覚了する最大の力用をもつのが、金剛慧であり首楞厳定であるという。[4]すなわち、如来法身を本具する衆生は、法華三昧

行の修習を通して、愛無明を覚了し、六根清浄なる仏の領域を頓覚して、仏の用きを顕現することが約束された存在であり、それ故に「一乗衆生」と称されるのである。

衆生の法身を十全に顕現せしめ、疾成仏道を現実化せしめる理想的な頓覚の行法が、慧思の言う法華三昧の行法である。法華三昧とは、文字通り法華経の精神に基づく三昧の行法をいうが、法華経においては、妙音菩薩品や妙荘厳王本事品に「法華三昧」という名称が記されるのみで、その具体的内容の説明は見られない。慧思の法華三昧行の組織は彼の独創にかかるものであり、法華経の普賢菩薩勧発品に依る有相行、及び同・安楽行品に依る無相行（四安楽行）の二種行から成り立っている。有相行は禅定に入らず、散心中にあって法華経を読誦し、法華経の経文に一心に専念するものであり、文字有相行と称される。一方、無相四安楽行とは、安楽行品に説かれるいわゆる身・口・意・誓願の四種安楽行を、深妙なる禅定中において修するものと規定されている。四種安楽行とは、慧思自身の命名に依れば、(1)正慧離著安楽行、(2)無軽讃毀安楽行、又は転諸声聞令得仏智安楽行、(3)無悩平等安楽行、又は敬善知識安楽行、(4)慈悲接引安楽行、又は夢中具足成就神通智慧仏道涅槃安楽行、をいう。[5] 慧思は、このうち、(1)正慧離著安楽行については、衆生忍・法性忍・大忍（神通忍）の三忍慧として展開しているが、その他の三種安楽行については、ただ右のような名目を挙げるのみである。菩薩は一切法（＝「三毒・四大・五陰・十二入・十八界・十二因縁」）の中に在って三忍慧を用いるのであり、この三忍慧が即ち正慧離著安楽行である、と慧思は説明している。彼は正慧離著安楽行を四安楽行の根本と考えていたのであり、一切法の中にあって、深妙なる禅定に裏づけられた三忍慧を実践するということを安楽行の、つまり法華三昧無相行の、中心的観念と見なしていたのであろうと思われる。

三　行　位　説

瓔珞経は五世紀後半に中国で成立した疑経であるとされる。[6] この経典において、十住・十行・十廻向・十地・等覚・妙覚位の四十二位（あるいは、十行位の前に十信位を加えた五十二位）の行位説が明かされるが、この行位説は後世多く依用されたものである。とくに第十地位（法雲地）と妙覚位の間に等覚位（無垢地）を立てて四十二位とするのは、本経に独自な教説である。天台智顗

は諸経論に説かれる行位説のうち特に本経の五十二位説に注目し、『法華玄義』迹門十妙中の位妙の段において、「若し位数を明すは須らく纓珞仁王に依るべし」[7]と言い、「今謂く、纓珞の五十二位は名義整足せり。恐らくは是れ諸の大乗方等別円の位を結するならん」[8]との評価を与えている。智顗の別円二教の行位説は、本経の五十二位説をベースにして論述が進められている。

慧思も瓔珞経の四十二位説を重視していた。後述するように、夙に散佚した彼の著作『四十二字門』は本経の四十二位説に全面的に依拠して著わされたものであり、そこには本経の経文が多く引用されていたことが知られている。あるいは彼は、法華経・方便品の開示悟入の所謂四仏知見に四十二位中の前四十一位（十住～等覚位）を対配させて説いており、また、本経に独自な行位である等覚位に注目していたことが知られる。そこで以下、瓔珞経の行位説について簡単に見てみる。

瓔珞経巻上・賢聖学観品において、四十二位の一一の行位の内容が説き明かされているが、この経典の行位説の特徴として

其正観者、初地已上有三観心一入二一切地一。三観者、従二仮名一入レ空二諦観、従レ空入二仮名一平等観、是二観方便道、因二是二空観一得レ入二中道第一義諦観一、双ニ照二諦一心心寂滅、進入初地法流水中。[9]

と述べられるように、行位が三観との関わりで説かれている点が挙げられる。たとえば、初住位では従仮名入空観が修習されるのであり、「始めて空界に入り、空性の位に住す」と説かれており、あるいは、初地（歓喜地）は「中道第一義諦慧に住」し、「三観現前し、常に其の心を修して百法明門に入る」位であると説明される。また、

従二初地一至二後一地一、有二果報神変二種法身一、一法性身、二応化身。[10]

と述べるように、初地已上にあって法身の作用が顕現されるという。また、七地已前は有功用の位であって、造作して功徳を修し菩薩の利他行を行ずるのであり、八地已上にあって無功用の位に入ると説明されるが、この八地已上において作仏を示現するという。すなわち、

初地乃至七地、三界業果俱伏尽無レ余。八地乃尽故。従レ此以上示ニ現作仏一、王宮受レ生出家得道、転二法輪一滅度、亦現二一切仏界一。故無二子愛三界之報一。唯有二無明習一在。以二大願力一故変化生。[11]

と説かれている。いま、八地の説明を見るに、

八不思議無功用観。所謂無相大慧方便大用。無レ有二色習一無明亦尽、百万劫事無量仏土事、已一念心中一時行。現二如レ仏形一切衆生形一、一念心中一時行已。無二功用一故。[12]

と記されている。次に瓔珞経独自の行位である等覚位（無垢地）においては、勇伏定中にあって、(1)学仏不思議変通、(2)集菩薩眷属、(3)重修先所行法門、(4)随順一切仏国問訊、(5)与無明父母別、(6)入重玄門、(7)現同如仏現一切形相、(8)二種法身具足、(9)無有二習、(10)登中道第一義諦山頂、の十種の事柄を修するものと規定されている。[13]この無垢地の菩薩は、「仏においては菩薩と名づけられ、菩薩においては仏と名づ」けられ、「如仏」「似仏非仏」の菩薩であるとされる。また、瓔珞経は菩薩の所謂歴劫修行を明かす経典であり、同じく等覚位の説明において、

無垢菩薩従二発心住一来、至二此一地一経二無量劫一、修二四十心無量功徳法門一、復従二喜地一修二行二種法身無量功徳一、経二百千劫一法蔵始満。入二相尽三昧一成二就一切智位一。

と述べられる。

なお智顗は、瓔珞経における五十二位中の五位（十信・十住・十行・十廻向・十地）と、三観及び四種の智慧（道慧・道種慧・一切智・一切種智）との関係について、

十信＝習二従仮入空観一。
十住＝証二従仮入空観一。具二足道慧一。
十行＝修二（証）従空入仮観一。具二足道種慧一。
十廻向＝修二中道正観一。具二足一切智一。
十地＝証二中道観一。具二足一切種智一。

のように整理している。[15]

さて、近年、佐藤哲英博士が滋賀県坂本西教寺の経蔵で発見された『四十二字門略抄』によって、夙に散佚していた慧思の著作『四十二字門』二巻の内容がいくぶん明らかになった。[16]『四十二字門略抄』は『四十二字門』から九十七文を引き、それらの引文に問答を設け、略釈を加えるという体裁を取っており、佐藤博士はこの略抄本の著者を、天台宗の学匠宝地房証真であると推定している。

四十二字門とは阿字から荼字に至る四十二字の梵字につき、その各々の字義を論ずるものであり、四十二字陀羅尼門とも称される。大品般若経巻五の広乗品（四念処品）には、

復次須菩提、菩薩摩訶薩摩訶衍、所謂字等語等諸字入門。阿字門一切法初不生故。（中略）荼字門入二諸

法辺意処一故不終不生。過レ荼無二字可レ説。[17]

と説かれ、また智度論巻四十八には

四十二字是一切字根本。因レ字有レ語、因レ語有レ名、因レ名有レ義。菩薩若聞レ字、因レ字乃至能了二其義一。是字初阿後荼、中有二四十一得二是字陀羅尼一。[18]

と説明されている。慧思はこれらの経論の所説を通して四十二字門に着目したのであろうが、この四十二字門を行位との関連で解釈したところに慧思の独自性があったと思われる。智顗の『法華玄義』巻五上の位妙の段には、

大品明二四十二字門語等字等一。南岳師云、此是諸仏密語、何必不レ表二四十二位一。諸学人執二釈論一云レ無二此解一、多疑不レ用。但論本文千巻、什師作二九倍一略レ之。何必無二此解一耶。[19]

とあり、又、同じく『維摩経玄疏』巻四には、

又大品経明二四十二字門一。初阿字門亦具二四十二字門一、後荼字門亦摂二四十二字門一。南岳師解、即是円教四十二地之異名也。[20]

と記される。すなわち、智顗の伝えるところに依れば、慧思は四十二字門を円教四十二位の異名であると解釈し、瓔珞経所説の四十二位の位位互具互入を唱えたのであるという。『四十二字門略抄』では、『四十二字門』からの第二番目の引文として、「若説二四十二地優劣一、是断滅見」という一文を取り上げ、これに「是以二円位一、破二別教一耳」という略抄本の撰者の批評が与えられている。[21]『四十二字門』に、智顗が紹介するような円教的な行位理解が述べられていたことが窺われる。ともかく、『四十二字門』においては、そのような行位理解を踏まえつつ、瓔珞経の行位説に従って、四十二位の一一の階位について解説が施されていたようである。いま、略抄本に依って、慧思の『四十二字門』における第二住、第八地、等覚位（無垢地）などの行位の理解を見てみると次の如くである。すなわち、瓔珞経には十住位は従仮入空観を修し、空理を証する階位として規定されるが、慧思はこの中、特に第二住位において所謂「沈空」の難が起こると解釈している。略抄本には『四十二字門』からの第二十二番目の引文と、それに対する撰者の問答として、

〔22〕上不レ見二諸仏一、下不レ見二衆生等一者。

問。花厳明二八地沈空一。有二此文一。今於二二住一。何有二此事一。答。十住入空故。作二是説一。問。若爾何只第二住耶。答。一一法門。位位皆有二教門一。[22]

のように記されている。瓔珞経の本文には第二住を沈空の位とするような記述は見られず、これは慧思の独自な

解釈であったと思われる。次に第八地については、略抄本には八十一番目の引文、及びそれに対する註が、

〔81〕不思議无功用観已下。
　瓔珞文。[23]

と述べられる。すなわち、慧思は『四十二字門』において、瓔珞経の第八地に関する記述をそのまま引用していたのであり、第八地を経文どおり無功用位と見ていたと思われる。また、次に等覚位について、略抄本には八十六番目の引文及びそれに対する撰者の問答が

〔86〕本初発心。唯期等覚者。
　問。唯期仏果。何期因位。答。外用八相。凡夫見之願成仏道。[24]

のように記されている。慧思は瓔珞経が独自に立てる等覚位を特に重視していたのであり、その事情の一端がこの箇所に窺われる。

慧思は、また、瓔珞経所説の四十一位(十住～等覚位)を、法華経方便品に見られる開・示・悟・入のいわゆる四仏知見に対配して説明していたようである。方便品には、

　云何名諸仏世尊、唯以一大事因縁故、出現於世、諸仏世尊、欲令衆生開仏知見、使得清浄

　故出現於世。欲示衆生仏之知見故、出現於世。欲令衆生悟仏知見故、出現於世。欲令衆生入仏知見道故、出現於世。[25]

と述べられる。この開示悟入の四句は、衆生が仏知見に参入する四つの段階を示すものと見られ、これに菩薩の階位を配当するような解釈が早くから行われていたらしい。智顗は『法華文句』巻四上において、方便品の「開示悟入」を釈する中、それが行位説と関連して様々に解釈されていたことを記録している(大正三四・50・A—B)。さて智顗は『法華玄義』巻五上において、

　方便品云、諸仏為一大事因縁故、出現於世、為令衆生開仏知見四句、南岳師解云、開仏知見是十住位、示仏知見是十行位、悟仏知見是十廻向位、入仏知見是十地等覚位。[26]

と述べ、慧思に瓔珞経の行位を開示悟入の四句に配当する解釈があったことを紹介し、それに引き続いて、

　皆言仏知者、得一切種智也。皆言仏見者、悉得仏眼也。(中略)引今文明四十二位炳然、皆是無次位之次位、達実相増道損生論次位耳。[27]

と述べている。以上に見るように、智顗は慧思の行位理解が、智顗の言う円教の行位説に合致するものであると

語っている。しかしながら、ここで両者の行位理解が必ずしも同一なものでなかったことは注意されねばならない。すなわち、智顗の円教行位説によれば、五十二位中、初住位において無明惑を破し中道実相の理を証見するのであり、初住已上の階位は自然に増道損生しゆく道すじとして規定される。それに対して、慧思の四十二位各位の内容理解は、前述したように、瓔珞経のそれをほぼ全面的に採用したものであり、十住を入空の位とし、十地において初めて三観現前し中道第一義諦を証するものとされる。にもかかわらず、慧思は十地已下の十住・十行・十廻向位における位位の互具互入を唱えるのである。そのような慧思の行位理解は、智顗の円教行位説に比して、教道方便的な色彩の濃いものと判断されよう。

四　頓覚行と行位説

さて、智顗の『摩訶止観』には、円頓速疾の行法たる十乗観法が説述されている。十乗観法とは、観不思議境、起慈悲心（真正発心）、善巧安心止観、破法遍、識通塞、道品調適、助道対治、知次位、能安忍、無法愛の十種の能観の観法をいい、これに対して、陰入界境、煩悩境、病患境、業相境、魔事境、禅定境、諸見境、増上慢境、二乗境、菩薩境という十種の所観の境が立てられる。それらの各々の境において十乗観法が修行されるものとされ、それ故、百法成乗と称される。この円頓速疾の行法として組織された十乗観法は、円教五十二位中、初住位への進入を目的とするものであり、円頓止観の修行者は今生に此の身において、歴別に由ることなく、入住の目的を遂げるという。『法華玄義』巻五上には円教初住（初発心住）位について

初発心住発時、三種心発。一縁因善心発、二了因慧心発、三正因理心発。（中略）住者住三三徳涅槃一。縁因心発、即是住三不可思議解脱首楞厳定一。慧心発即是住三摩訶般若畢竟之空一。正因心発、即是住三実相法身中道第一義一。挙レ要言レ之、即是住三三徳一切仏法一也。[28]

と説明されている。そして、華厳経の「初発心時便成三正覚一」、あるいは大品般若経の「従三初発心一即坐三道場一、転三法輪一度三衆生一。当知、此菩薩為レ如レ仏」や涅槃経の「発心畢竟二不レ別」などの経文は、初住位を説き明かすものであるとされる。円教の十乗観法を修する行者は、上述の如き無功用位たる初住位に速疾に進入するのであり、それ以降、妙覚位に至るまで「如仏」の菩薩として、増道損生の無功用道を任運自然に進み行くものと説明さ

れている。

次に、慧思は瓔珞経の行位説を依用していたのであるが、彼が組織した頓覚・速疾成仏の行法たる法華三昧行は、瓔珞経所説の四十二位のうち、どの階位へ頓入することを目指していたのであろうか。この問題について考えるために、法華三昧行の悟りが開示する世界がどのようなものとして描かれているか見てみよう。

まず、法華三昧の有相行は法華経・普賢菩薩勧発品に依って立てられた行法で、散心中に在って法華経を読誦し、その経文に一心に専念するものである。この行法が成就する時、行者は眼根清浄を得て釈迦仏、過去七仏、及び三世十方の諸仏を見、そして三種陀羅尼門を得て、一切三世の仏法を具足するという。三種陀羅尼門とは初旋陀羅尼門、百千万億旋陀羅尼門、及び法音方便陀羅尼門のことであり、普賢菩薩勧発品には

是人若行若立、読誦此経、我（＝普賢菩薩）爾時乗六牙白象、与大菩薩衆俱詣其前、而自現身、（中略）以見我故即得三昧及陀羅尼、名為旋陀羅尼、百千万億旋陀羅尼、法音方便陀羅尼。[29]

と説かれるが、慧思はこの三種陀羅尼について

得三陀羅尼門。一者総持陀羅尼（＝初旋陀羅尼）、肉眼天眼菩薩道慧。二者百千万億旋陀羅尼、具足菩薩道種慧、法眼清浄。三者法音方便陀羅尼、具足菩薩一切種慧、仏眼清浄。是時即得具足一切三世仏法。或一生修行得具足。（中略）極大遅三生即得。[30]

と説明している。ここでは三種陀羅尼が、五眼（肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼）及び三慧（道慧・道種慧・一切種慧）との関連で説き明かされている。そこで次に、慧思において五眼や三慧（三智）がどのように理解されているかを見てみるに、彼の『随自意三昧』坐威儀品には、

菩薩常入禅定、起大神通、能浄五眼。肉眼清浄、天眼通達、慧眼見真、法眼観察、仏眼覚了一切、能度十方世界無量衆生。不前不後、一時得道。[31]

と、五眼を簡略に説明し、また、同じく『諸法無諍三昧法門』巻上には、諸仏の説法・衆生済度のあり様が

三世十方無量諸仏、若欲説法度衆生時、先入禅定、以十力道種智、観察衆生根性差別、知其対治得道因縁、以法眼観察竟、以一切種智説法度衆生。一切種智者名為仏眼、亦名現一切色身三昧、亦名普現色身三昧。[32]

と語られている。一切種智は仏眼と名づけられ、それは

現一切色身三昧、あるいは普現色身三昧を示現するものであるというのである。慧思にとって普現色身三昧は、その主体的な禅定三昧行の目指す究極の内面的な能力であり、利他行を最高の理想的な形態に至らしめる根拠であったと思われるが、その三昧の内実について、上記の文に引き続き、

上作二一切仏身諸菩薩身一、（中略）下作二三塗六趣衆生之身一。如レ是一切仏身一切衆生身、一念心中一時行、無レ前無レ後亦無二中間一、一時説法度二衆生一。[33]

と説明される。普現色身三昧に関する上記のような説明は、慧思がほぼ全面的に依用していた瓔珞経の四十二位に即して言うならば、第八地無功用位の「八には不思議無功用の観なり。（中略）百万劫の事、無量仏土の事、已に一念心に一時に行ず。仏の如き形、一切衆生の形を現じ、一念心の中に一時に行じ已る。功用無きが故なり」という経文の記述と相応するものである。また、後に智顗は、先に述べたように、別教五十二位中の五位（十信位～十地位）を三観と関連づけて説いたが、三種陀羅尼についても、

初旋陀羅尼＝「旋レ仮入レ空」
百千万億旋陀羅尼＝「旋レ空入レ仮」
法音方便陀羅尼＝「入二中道第一義諦一」

のように三観（三諦）と結びつけて説明している。[34]これらに徴して考えるに、慧思において、法華三昧・有相行を証悟するとは、三観を証し、五眼を具足し三慧を得て、普現色身三昧を示現することを意味し、すなわち、瓔珞経の四十二位中の、第八地無功用位への進入を成就するものであったと言える。

次に、法華三昧・無相行の中心的観念は、前述したように、深甚禅定の中にあって衆生忍・法性忍・大忍（神通忍）の三忍慧を修行することである。三忍慧のうち、衆生忍と法性忍については、「二種の忍は無明煩悩を破するの忍と名づけ、また聖行忍と名づく。（中略）凡夫能く行ずれば聖位に入る」と説明される。大忍（神通忍）については、「大忍とは五通及び第六通を具足し、四如意足を具足し、十方諸仏及び諸天王に面対す。面対して共に語り、一念に能く一切凡聖を覚了するが故に大忍と名づく。諸の神通に於て心動ぜず」と説明され、また、大忍を神通忍と名づける所以について次のように説かれる。

大忍者名二神通忍一。云何名為二神通忍一。菩薩本初発心時、誓度二十方一切衆生一、勤二修六度法施戒忍辱精進

禅定三乗同品一切智慧、得レ証二涅槃一、深入二実際一、上不レ見二諸仏一下不レ見二衆生一。即作二是念一、我本誓度二一切衆生一、今都不レ見二一切衆生一、将不レ違二我往昔誓願一。作二是念一時、十方一切現在諸仏即現二色身一、同二声讃一二歎此菩薩一言、善哉善哉、大善男子、念二本誓願一莫レ捨二衆生一。（中略）十方諸仏説二是語一時、菩薩是時聞二諸仏語一、心大歓喜即得二大神通一、虚空中坐尽見二十方一切諸仏一、具二足一切諸仏智慧一。（中略）為レ度二衆生一、色身智慧対レ機差別、一念心中現二一切身一、一時説法、一音能作二無音音声一、無量衆生一時成レ道。是名二神通忍一。[36]

この記述は、空を証し、深く空観に徹するところから真の利他行に出ていくのが不変の菩薩道の道すじであるということを、菩薩のいわゆる沈空の難、及びこの菩薩に対する諸仏の讃歎・勧化という事柄を通して語っているものと理解することができよう。智度論の第七住の説明[37]や十地経論の第八地の説明[38]において、菩薩が沈空の難を経て無功用の真の教化地に出ていくという事態が述べられるが、慧思の神通忍に関する記述はそれらの教説に基づくものと考えられる。瓔珞経の四十二位説においては、第八地が無功用の教化地として説かれるが、この経典では十住位が従仮入空の位と規定されており、それ故、沈空の難も十住位中の出来事であると見なされる。瓔珞経の行位説に依拠していた慧思は、前にも述べたように、菩薩の沈空を第二住における事柄と見ていたようである。すなわち、瓔珞経所説の行位に即して言えば、慧思の神通忍に関する記述は、神通忍の成就が、第二住における「上不レ見二諸仏一下不レ見二衆生一、云云」という沈空の難を経て、更に第八地の無功用教化地への進入を意味することを描いたものと理解できる。結局、頓覚・疾成仏道の行法である慧思の法華三昧・無相行は、有相行と同様に、瓔珞経所説の四十二位中、第八地無功用位への頓入を目指すものであり、「如仏」の菩薩の境界を成就しようとするものであったと言えよう。

さて、瓔珞経においては、第十地（法雲地）と妙覚位との間に、この経に独自の階位である等覚位（無垢地）が立てられるが、慧思は等覚位をきわめて重視していたようである。彼の『四十二字門』には、「本初発心唯期二等覚一」と語られており、更にそれを裏づけるような記述が『立誓願文』に見出される。『立誓願文』は慧思が光州大蘇山に在って、金字の大品般若経及び法華経を作成した折に記されたものである。慧思が弥勒信仰との関連

において等覚位に注目していたことが推察される。弥勒信仰には概して、弥勒の兜率天に上生することを願うものと、五十六億七千万年を経て弥勒成仏せる時の龍華三会の説法を期するものとの二つの形態があった。慧思の弥勒信仰は『続高僧伝』巻十七の慧思伝の

夢二弥勒弥陀説法開レ悟、（中略）又夢随二弥勒一、与二諸眷属一同会二龍華一。[38]

という記述に示される如く、兜率天への往生を願うものではなく、龍華三会を期するものであった。『立誓願文』に

進不レ値二釈迦出世一、後復未レ蒙二弥勒三会一、居二前後衆難之中一、又藉二往昔微善根力一、釈迦末世得二善人身一。[39]

とあるように、釈迦・弥勒間の無仏の、法滅現前せる悪世に生まれた慧思の悲歎には大きなものがあったと思われる。彼には法滅の危機感に裏打ちされた強烈な正法護持の精神があり、自ら護法の菩薩をもって任ずる強固な意志があった。同じく『立誓願文』には

我従二末法初一始立二大誓願一、修二習苦行一、如レ是過二五十六億万歳一、必願具二足仏道功徳一、見二弥勒仏一。[40]

と言い、あるいは又、

願持二釈迦法一、常住不二滅尽一、至二弥勒出世一、化二衆生一不レ絶、誓於二此生一作二長寿五通仙一、修二習諸禅定一、学二第六神通一、具二足諸法門一、成二就等覚地一。[41]

と願い、又、

我従二発心一所有福業尽施二衆生一、至二於当来弥勒世尊出世之時一、具二足十地一入二無垢位一、於二授記人中一最為二第一一。[42]

と誓願している。このような法滅の危機意識に裏打ちされた慧思の護法の願行は、無仏の悪世において、慧思自身が長寿の仙となり、弥勒仏の出世に至るまで菩薩行に邁進し、等覚位をきわめ、遂には龍華三会を蒙って受記作仏（妙覚作仏）せんことを期するものであった。すなわち、法華の行者は、頓覚・速疾成仏の理想的な行法たる法華三昧行を成就することによって第八地の無功用教化地に頓入し、「衆果具足」して「如仏」の境界を覚悟するのである。更に彼は「如仏」の菩薩として、弥勒の出世に至るまで、無仏の悪世において久遠にわたって、護持正法・護持衆生の菩薩行に邁進し、九地已上の階位に次第に入証しつつ遂には等覚地をきわめ、そして、弥勒三会に遇って受記し作仏（妙覚作仏）を成ずるのである。――頓覚・疾成仏道説、行位説、あるいは末法説、

護法思想、弥勒信仰などの諸要素に裏づけられた慧思の仏道思想においては、菩薩の仏道全体の道すじが以上のようなものとして想定されていたと思われる。

五　おわりに

天台智顗は瓔珞経の五十二位説に依拠して別円二教の行位説を組織した。彼は十住入空・十地入中を説く瓔珞経の行位説を別教教道の説と見なし、円教の立場から、初住位をもって中道三観が現前し、無功用位に証入する位と規定した。慧思も瓔珞経の四十二位説を依用したが、彼の場合、各行位の内容については、この経典の教説をほぼ全面的に採用している。すなわち、彼は十住位を空観を修し空理を証する位とし、乃至十地を三観現前し中道実相理を証得する位と見、その中、第八地已上を無功用位と判じていた。また、慧思は四十二字門などの経説に基づき、四十二位の位位互具互入を唱えており、そのような慧思の行位説に対して、後に智顗は、それが円教の行位観に合致するものであるとの評価を与えている。しかしながら、瓔珞経の行位説をそのまま採用し、十地入中を唱えつつ、同時に四十二位の互具互入を説く慧思の行位説は、智顗の円教の行位説に比して、教道方便のそれであったと判断しうるのである。

次に、頓覚・速疾成仏を現成する理想的な行法として、慧思においては法華三昧行が、又、智顗においては円教十乗観法が、組織されている。それらの行法は共に無功用位への進入を目的とするものであるが、上述の如き行位説理解の異なりから、前者は第八地への頓入を目指し、後者は初住位への進入を目的とすると規定されたのである。また、慧思においては、第八地頓入を終えた法華菩薩の、九地已上の階位への道すじが、護法思想や弥勒信仰などの諸要素によって、極めて特異なものとして現われてきており注目される。

註

① 大正五〇・563・B
② 大正四六・697・C
③ 大正四六・698・B—C
④ 大正四六・699・A
⑤ 大正四六・700・A
⑥ 佐藤哲英「瓔珞経の成立に関する研究」（『龍谷大学論叢』二八四・二八五）
⑦ 大正三三・731・C
⑧ 同右
⑨ 大正二四・1014・C
⑩ 大正二四・1015・C

⑪ 大正二四・1016・C
⑫ 大正二四・1015・B
⑬ 大正二四・1015・B—C
⑭ 大正二四・1015・C
⑮ 大正三三・732・A—B
⑯ 佐藤哲英「『四十二字門略鈔』の本文並びに解説——南岳慧思研究における文献価値について——」（『福井博士頌寿記念・東洋文化論集』所収）
⑰ 大正八・256・A—B
⑱ 大正二五・408・B—409・A
⑲ 大正三三・735・A
⑳ 大正三八・542・A
㉑ ⑯佐藤論文・五一五頁
㉒ 同右五一八頁
㉓ 同右五二七頁
㉔ 同右
㉕ 大正九・7・A
㉖ 大正三三・735・B
㉗ 同右
㉘ 大正三三・734・A
㉙ 大正九・61・A—B
㉚ 大正四六・700・B
㉛ 続蔵二・三・四・347・左
㉜ 大正四六・627・C
㉝ 同右
㉞ 『法華文句』巻十（大正三四・148・C）
㉟ 大正四六・701・C—702・B
㊱ 大正二五・132・A
㊲ 大正二六・179・A
㊳ 大正五〇・562・C
㊴ 大正四六・786・C
㊵ 同右
㊶ 大正四六・791・C
㊷ 大正四六・789・C